

『鈍吟書要』に見られる道学思考のかたちに就いての一考察

松宮 貴之

はじめに

一 馮班の朱子学と性理学

二 理学と趙孟頫の評価

三 董其昌書論の読み替え

四 道学書論の構造

五 本領と理学

小結

中国の明末清初の時代、頽廢と復興の混乱の社会風潮の中で、当時の王道であった董其昌の書法にも、批判が加えられ、新たに道学思想を復古的に盛り込んだ強固な書論が誕生した。

その作者、馮班の意図するところは、何だったのか。何を企図したのか。

中国書論史に於いて近世以後、蘇軾・黄庭堅・米芾に代表される外向型（陽明学系）、個性系の思惟潮流が脚光を浴びる裏面で、やや日陰で朱子学的な内向型の精神書論も同時に研究されていたが、それが一つの節目として、ここで登場する。

趙孟頫の書を朱子学、董其昌の書を陽明学の反映とみる観方を突き抜けて、朱王一致の時代を象徴する両者の結実の書論を構築した、馮班の思考構造を垣間見る。

「本領論」として立ち上がるその復古的姿（尚古主義）は、どの領域でもであるが、「古典」を学ぶことが高尚であった、それは「俗」と相反するからである。

動乱の時代に求められた法帖学のカタチ。その馮班の『鈍吟書要』を、思想として読み解き、その存在意義を検討する。

はじめに

中国書論史に於いて、明末から清初にかけて大きな影響力を放った第一人者と目されるのは、やはり董其昌に他ならない。

後に清朝帖学派と言われる面々は、各々、精神主義書法家ともいえる董其昌をどう捉えるか、いかに認めるか、認めないか、それといかなる位置取り、関係性を結ぶか、その継承と変容が中心命題だったと言える。

中でも清の馮班は、その命題を負いながら、独自の道学観を反映させた書論を構成し、独自の書論を形成している。

一般的に、朱王一致（朱熹・王陽明）と言われる、時代風潮の中で、その思想の影響が書論に、どう反映されたのか、ここでは分析し、その現実的な有効性についても考察したい。

つまり本稿では、馮班の書論『鈍吟書要』の道学意識、及び董其昌観を中心に検討、考察する。

馮班（「生」万曆二〇（一六〇二）「没」康熙一〇（一六七一））。

中国、清初の文学者・書論家。江蘇常熟の人。同郷の錢謙益に師事し、ともに反擬古の論を唱え、盛唐を高く評価する嚴羽の『滄浪詩話』に反対し、晩唐を宗とした。主著

『鈍吟雜録』『鈍吟集』がある。

董其昌とは五九年ほどの年齢差があるが、まだその影響が色濃い世代の人物と言えよう。

馮班は、生涯官途に就かなかつたが、その文人の書論思想の葛藤は、所謂「内、向、型」であり、書論界を賑わした近世以降の「外、向、型（個性系）」と対をなす構造と言える¹⁾。

ここではそのやや日陰の存在、内向型の道学的思想の反映を軸にして、その思想を垣間見ていきたい。

一 馮班の朱子学と性理学

『鈍吟書要』の底本には、馮班の甥の馮武の編した『書法正伝』十卷（王雲五主編・人人文庫・台湾商務院書館）所収のものに拠った。

また参考文献として、馮班の「鈍吟書要」の研究論文は、管見では確認できなかったので、『中國書論大系』第十一卷 清I（二玄社 一九八二年）に杉村邦彦の邦訳があり、また『精萃 図説書法論』五 清I（西東書房 一九八八年）に森素香の訳注があり、主に訳出については、ともに大意（意訳）や考察の参考とさせて頂いた。

さて、『鈍吟書要』の冒頭で、
書是君子之芸。程、朱亦不廢。

（書は君子の芸である。程朱学も廢せられない。）

と述べるように、馮班は、二程子、朱子支持を宣言してから稿を進めている。

そして、その実態は、『鈍吟雜録』卷二の中で、

初随俗看性理雅不服朱子、後読朱子語類始知先儒俱是天下第一等人。但未免大醇小疵、後儒專取他那小疵处、便不好看可恨集性理的全無見識。今日後生輕躁非薄古人皆不知学問者也。朱子引京房易伝性理疑似誤字当时人学如此。

(はじめは俗儒の性理学の影響で朱子学に納得していなかったが、『朱子語類』を読んでから、昔の学者は素晴らしいところが分かった。ただ大部分にちょっとした瑕疵が混じっているので、後の人はそのわずかな瑕疵を頑張って探してあげつらうので、後世の性理の書物は碌なものがない。今時の人間は軽々しく昔の人を馬鹿にするがそれは無学というものである。朱子の引く『京房易伝』を引いているところは、誤字があるので、当時のひとは学ばなかったのは、これが原因である。)

と述べていることから明かである。

これを、少しく分析すると、若い頃は俗儒の性理学の影響で朱子学に納得していなかったが、『朱子語類』を読んだから、昔の学者(朱子を指す)は素晴らしいところが大部分で、ちょっとした瑕疵が混じっているのだとわかった。

後の人はそのわずかな瑕疵を頑張って探してあげつらうので、後世の性理の書物は碌なものがなく、今時の人間は軽々しく昔の人を馬鹿にするがそれは無学というものだ、というのが全体の意味なので、基本的に朱子を褒めている。ただ、最後の『京房易伝』を引いているところは誤字があるではというところが問題で、当時の人はこんなにも不学なのだ、という当時の人が朱子だとすれば突然、朱子学批判に転じることになる。

しかし、朱子は『京房易伝』を引用しているところで、性理書は字の誤りを指摘していて(正しいのに)、そのことに対して、性理書が書かれた当時の人は、学問がなっていないと馮班は嘆いていると理解すれば、前後の内容は一貫する。

性理書というのは、恐らくは『性理大全書』や、その関連本・注釈のことではないかと思われる。

全体として、ここでの話題は、当時の、先人に対するつまらない訂正ばかりの性理書に対する批判がメインの内容で、性理学そのものに対する馮班の評価はここでは示されていない。

更に『雜録』の引用の部分の直前の条では、程朱に批判的なことも言っているが、批判しているのは『詩経』の解釈の話で、性理学そのものではないので、性理学そのもの

に対する評価は、この部分だけでは、なんとも言えない。つまり程朱に対して、一定の敬意はうかがえるが、盲従しているわけではないのだろう。

『語類』を読む以前にそれほど、朱子に反対する考えがあったわけでもないと思われ、性理書の内容が悪いから、朱子に納得いかなかったと言っているようにも考えられるが、二程、朱子の性理学を、放棄しているとも考えにくく、馮班なりの解釈があったのであろう。

ところで、『書要』では、

結字晋人用理、唐人用法、宋人用意。用理則従心所欲不踰矩。因晋人之理而立法、法定則字有常格、不及晋人矣。(結字は、晋人は、理を用い、唐人は、法を用い、宋人は意を用いた。理を用いたならば、心の欲するところにしたがっても、羽目はずさない。晋人の理にもとづいて法を立てるが、法が定まって常格があるようになると、晋人に及ばなくなる。)

と述べる「理」は、『朱子語類』学六・持守に、

問「二程専教人持敬、持敬在周一。浩熟思之。若能每事加敬則起居語默在規矩之内、久久精熟、有『従心所欲、不踰矩』之理。顔子請事四者亦隻是持敬否」

(二程子(程顥・程頤)は、もっぱらひとに「持敬(敬を保持する)」を教え、持敬の要は、「周一(一つのことに集

中する)」にあるとしました。私はじっくり考えてみましたが、もし事ごとにこの敬を加えることができれば、起居語黙、日常の立ち居振る舞いはすべて規矩の内に収まり、ひさしくそうして習熟すれば、孔子の言う「心の欲するところにしたがっても、矩を踰えず」の道理を得ることになるでしょう。……)

とあるように、『論語』の「従心所欲不踰矩」の理は、しばしば議題となつていたので、朱程子の理の定義の一つを用いたものであろう。

また馮班が蔡君謨(蔡襄)の書を評価するのも、朱子書学思想の継承である。

以上のように、馮班は朱程子の学の理を、独自性をもつて書論に反映させたと考えて大過なからう。

二 理学と趙孟頫の評価

さて、『書要』の冒頭で、

趙松雪更用法、而參以宋人之意、上追二王、後人不及矣。

為奴書之論者不知也。唐人行書皆出二王、宋人行書多出

顏魯公。趙子昂云、用筆千古不變。隻看宋人亦妙、唐人難得也。

(趙孟頫はさらに法を用い、交えて宋人の意を用いたが、上は二王(理)を追ったが、後人は及ばなかった。これを

「奴書」と論じる人は、それが分からないのだ。唐人の行書は皆二王から出ており、宋人の行書は、多く顔真卿から出ている。趙孟頫が言う「用筆は千古不變」と言うが、宋人のうまさを見て取れても、唐人は得難いのである。」

とあるように、馮班は書の理を晋（二王）に求めていたが、その説は趙孟頫への評価と、重なりを見せる。

ただし、

趙文敏為人少骨力、故字無雄渾之氣、喜避難、須參以張從申、徐季海方可。季海筋在画中、晚年有一種如渴驥奔泉之勢、老極。所以熟而不俗。張書古甚、拙處人不知其妙也。

（趙孟頫は、人となりに骨力が少ないので、字に雄渾の気がなく、難なきを喜ぶので、張從申・徐季海を加味するとよい。季海は筋が画の中にあり、晩年には、一種の「喉の渴いた駿馬が泉に奔る」ような勢いがあり、老気があるのて円熟して、俗気がない。張の書は古風だが、その拙いところに妙味があるが、ひとは気付かない。）

とそれ（理）とは別に雄渾の氣象の有無について言及し、加味すべきを補うが、

趙松雪出入古人、無所不學、貫穿斟酌、自成一家。當時誠為獨絶也。自近代李禎伯創奴書之論、後生恥以為師、甫習執筆便羞言模倣古人。晋、唐旧法於今掃地矣。松雪

正是子孫之守家法者、爾詆之以奴、不已過乎。但其立論欲使字形流美、又功夫過於天資、於古人蕭散廉斷處、微為不足耳。如禎伯書、用尽心功、視古人何如哉。

（趙孟頫は古人に出入して、学ばないところが無いほどで、深く窮めてほどよく調節し、自ら一家を成した。當時は、まことに独絶とされた。しかし近い時代になって李禎伯が、彼の書を「奴書」とする論を唱えるようになって、後世のひとはかれを師とするのを恥とするようになり、はじめ執筆法を習うところから古人をまねることを羞むるようになったため、晋唐の旧法は地に掃われて失われてしまった。趙孟頫は、まさに子孫の家法を守ったのであり、かれをそしって「奴」とするのは、ゆき過ぎではないだろうか。ただその立論は、字形を流美にさせ、さらに工夫が天然を過ぎるようになるのぞんだもので、古人のような齒切れのよさは、やや足らないだろう。李の書も工夫は尽くしているが、古人なら、どうみるだろうか）

とあるように、李禎伯の工人的とも言える趙孟頫を奴書とする論に批判を加えている。

またこの論は、董其昌の《臨王羲之十七帖卷》巻首言にも、

趙承旨書、不失尺寸於晋唐諸家、無所不模倣。然無象外奇聳蕭閑之趣、如山陰名士之視孫興公、東林十八賢之視

謝靈運。若人能參顏柳門庭則知此言不謬矣。守法不變、定成奴書。

(趙孟頫は奉書するも、晋唐諸家と寸尺も違えず、模擬しないところはなない。しかし閑趣の趣きが外に聳えたところもなく、山陰の名士が孫興公をみたり、東林の十八賢が謝靈運をみるかのようだ。もしひとが顏真卿や柳公権の庭に參ずることができれば、この言葉の誤っていないことが分かる。法を守って変わらざれば、定めて奴書となす。)とあるように董其昌にも繼承されており、模倣を嫌う董其昌らしい言説であり、陽明学的に理氣二元論の氣の在り方を問題視したが、馮班は作為的(工的)な書風とも言える趙孟頫の道学性を評価しているので、その急襲は不適當であるとすするスタンスである。

それでは、次に馮班が、董其昌をいかに繼承、変容し、どう捉えたかを見て行きたい。

三 董其昌書論の読み替え

さて、馮班の「結字晋人用理、唐人用法、宋人用意。」説、その中心命題自体が、董其昌の「晋人の書は韻を取り、唐人の書は技を取り、宋人の書は意を取る」(『容台別集』卷四『書品』)の読み替えであることは言を俟たないだろう。

さらに『書要』の冒頭部で、

近董思白不取遒健、学者更弱俗、董公却不俗。

(近頃では、董其昌は「遒健」を求めなかったから、その書を学ぶものはますます「繊弱」で俗となったが、董其昌自身は俗ではない。)

とあり、董其昌の繼承者への批判、つまり世俗の批判をあらゆる評価しているが、更に後文では、

趙子昂用筆絶勁、然避難從易、變古為今、用筆既不古、時用章草法便拙。当其好處、古今不易得也。近文太史学趙、去之如隔千裏、正得他不好處耳。枝山多学其好處、真可愛玩、但時有失筆別字。董宗伯全不講結構、用筆亦過弱、但藏鋒為佳、学者或不知。董似未成、字在文下。

(趙孟頫の用筆は絶勁(はなはだつよい)が、難しさを避け易しさに従い、古法を変えて今様にしている。用筆はもとより古くなく、時に章草の法を用いるが拙い。そのできのよいところは、古今にもたやすく得られない。近頃は、文徵明が趙孟頫を学んだが、千里も離れているようで、まさに彼のよくないところを得たに過ぎない。祝允明は、おおくそのよいところを学んで、まことに愛玩すべきだが、ただ時に書き損じや、別字がある。董其昌は結構に全く意を用いず、用筆も弱すぎるが、藏鋒だけはいい。彼の書を学ぶものにそれを知らないものがある。董其昌は、まだ未

成のようで、その実力は文徵明の下だ。)

とあり、董其昌の絶対化は緩和され、やや批判ぎみに、相対化されて語られている。

この趙孟頫と董其昌を構造的に捉え、趙孟頫を格上にして、董其昌を文徵明以下と格下に位置付けているのは、つまりところ朱子学的に趙孟頫を捉える「絶勁」論と「弱俗」化していた董其昌の流れを批判しつつ、その真価を述べていることが分かる。

恐らく当時、偽物贋物が出回り、下手な継承者が横行し、関係法帖も薄利多売化され拡散、さらに追い打ち的に頹廢に傾きやすい陽明学左派の流行、欲望肯定派が幅を利かせていたことに対して、厳格な論理を求める反動の風土が、社会的に醸成されていたのかもしれない。精神主義が過ぎると、反動的に「型」を求めるのは、書法史の摂理とも言えよう。

また付言になるが、

画有南北，書亦有南北。

(画にも南北があるように、書にも南北がある。)

と述べており、董其昌の画の南北二宗論を踏まえ、後の阮元の北碑南帖論に列なる説をこの時点で提出していることは、特記すべきである。

また董其昌が書画思想のバックボーンとした「禪」につ

いて、馮班自体やや否定的であったようである。⁷⁾

ともあれ、馮班は趙孟頫と董其昌を補完的に捉え、またその流れで董其昌の説に影響され、新知見まで提出していると言えるだろう。

四 道学書論の構造

では、その董其昌流の世俗化の流れに逆らい、馮班がいかに新しい論理を提示したかここで再度、確認しておきたい。

恐らく道学の理を持つて書論に投影させたと思われる、『書要』で、

因晋人之理而立法、法定則字有常格、不及晋人矣。宋人用意、意在学晋人也。意不周弊則病生、此时代所压。趙松雪更用法、而参以宋人之意、上追二王、後人不及矣。為奴書之論者不知也。唐人行書皆出二王、宋人行書多出顏魯公。趙子昂云、用筆千古不變。隻看宋人亦妙、唐人難得也。蔡君謨正書有法無病、朱夫子極推之。錐画沙、印印泥、屋漏痕、是古人秘法。姜白石云、不必如此。知此君憤憤。

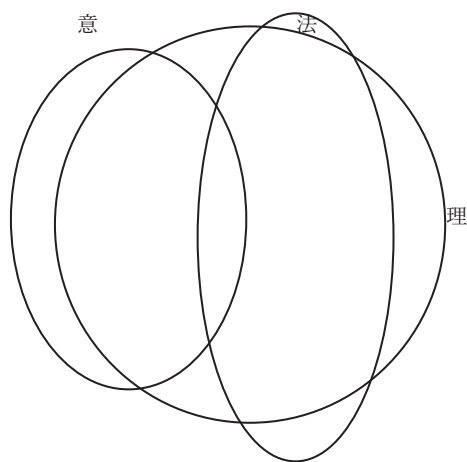
(晋人の理にもとづいて法を立てるが、法が定まって常格があるようになると、晋人に及ばなくなる。宋人は意を用いたが、その意は晋人を学ぶことにあった。その意が十分

でない、弊害が生じるが、この時代に圧されたのである。趙孟頫は、さらに法を用い、宋人の意を加え、上は二王を追い求めたから、後世の人は、及びもつかなかった。彼の書を「奴書」と論じたものは、書が分からないのである。唐人の行書は、皆二王から出ており、宋人の行書は、多く顔真卿から出てきている。趙孟頫は、「用筆は千年の古から変わらない」と言っている。ただ宋人をみてうまく学べても、唐人をものにするのは難しい。蔡君謨の楷書は、法があり、癖がないから、朱子はこれを推奨した。錐画沙、印印泥、屋漏痕、これは古人の秘法である。姜白石が、「必ずしもそうではない」というが、これはこの人が書を分かっていないからである。）

これらの、理と法と意の構造を簡単に図示すると、右下図のようになるだろう。さらに、

学草書須逐字写過、令使軼虛實一尺理、至興到之時、筆勢自生。大小相參、上下左右、起止映帶、雖狂如旭、素威臻神妙矣。古人醉時作狂草、細看無一失筆、平日工夫細也。此是要訣。

(草書を学ぶには、一字ずつ書き進めるべきで、使軼虛實ひとつひとつ理をさわめれば、感興に応じて筆勢が出るのである。大小が交わり、上下左右、起筆と収筆が映りあえば、張旭や懷素のように狂逸でも、みな妙境に入ったので



ある。古人が酒に酔って狂草を書いたが、つぶさに見ても書き損じがないのは、平日の工夫があったからである。これこそ要訣だ。)

とあり、また

晋人尽理、唐人尽法、宋人多用新意、自以為過唐人、實不及也。婁子柔先生云、米元章好割截古跡、有書賈俗氣。名言也。

(晋人は理を尽くし、唐人は法を尽くし、宋人は多く新意を用い、自分では唐人よりすぐれていると思っっているが、実際は及ばない。婁子柔先生が、「米芾は、好んで古い書

跡を切りさいたので、本屋の俗気がある」と言ったのは、名言である。）

とあるのは、理、法、意の構造を明らかに証明している。

あと、

姜白石論書、略有梗概耳。其所得絶粗、趙松雪重之、為不可解。

（姜白石が書を論じたものはほぼ概略を論じただけである。その会得したところは、甚だ粗雑だ。趙孟頫が彼を重んじたのがなぜか、分らない。）

と度々、姜夔を批判するのは、その書論に理学的な影響がないことも要因の一つだろう。

以上のように馮班は、敢然と道学で書論を再武装し、より強固な論理を構築せんとしていたことが、分かる。

五 本領と理学

例えば『朱子語類』卷十二に、

人之爲學、千頭萬緒、豈可無本領。

（ひとの学問をするや、千頭万緒、どうして本領ないことがゆるされようか。）

とあったり、明の王守仁『傳習錄』卷上・門人薛侃録に、

若泥文逐句不識本領、即支離決裂、工夫都無下落。

（もし文章の一字一句に拘泥し本領（根本のところ）が

分らないと支離滅裂になり、修業がすべてとりとめのないものになるだろう。）

とあるように、本領とは、朱子学や陽明学で頻用される言葉であり、「根本」とか「能力」という意味で使うことが多く、「心」の意味になることもある。

馮班は、それを書論に援用したのであろう。

本領者將軍也、心意者副將也。本領極要緊、心意附本領而生。

（本領は將軍であり、心意は副將である。本領は、極めて大切なもので、心意は本領に付随して生まれる。）

とあり、その武裝的な言語は、王羲之の『筆陣圖』などを想起させる。さらに、

本領精熟、則心意自能變化。

（本領が精熟すれば、心意はおのずからよく変化する。）とある「本領」とは、書論的には、具体的に何を意味するのだろうか。

本領者、將軍也。心意者、副將也。所謂本領、只是規模古人、然須有取舍、不得巧拙兼效。雖欲博涉諸家、然須得通會、不可今古雜出。唐人尚法、用心意極精。宋人解

散唐法、尚新意、而本領在其間。米元章書如集字是也、至蔡君謨則点画不苟矣。坡公立論、亦雅推君謨。

（本領は將軍であり、心意は副將である。いわゆる本領と

は、ただ古人を手本とすることであるが、そこに取捨がなければならず、巧拙が一緒になってはいけない。諸家を広く学びたいと思っても、それらを貫くものを修得すべきで、今と古がごちゃ混ぜになってはいけない。唐人は法を尊び、心意を用いることが、極めて精密である。宋人は唐の法を解き放ち、新意を尊んだが、しかも本領はその間にある。米芾の書が、集古字といわれたのが、それである。蔡君謨に至っては、一点一画をかりそめにしない。蘇軾は論を立てたが、常に君謨を推奨した。）

さらに、具体的に見ると、
本領千古不易、用筆学鐘、結字学王。

（本領は千年の古から変わらないもので、用筆は鍾繇を学び、結字は王羲之を学べ。）
というものであり、徹底した書論の尚古主義に根差したものであり、中世書論に朱子学の理を求めた「思考のかたちと新しさ」は当時、衝撃的だったことは、想像に難くないだろう。

小結

書、書論とは、もともと精神的なものであって、「虚実」で言えば、「虚」の世界に分類されるであろう。ただ実際

に、どういう「実」の部分があつたのかのことも思惟されなければならぬ。

書によって、立場、尊敬、集団利益を得る等さまざま像は、可能である。

またこの書論では、董其昌の絶対化が、やや緩和され、相対的に評価され始めているが、その流れを継承するという自負は顕著である。おそらく、そこには何らかのステータスがあつたと考えられる。

但し、道学、朱子学によって、書論の骨格を構成し直し、道学の一領域として書論を編纂した功績は顕著であり、単なる継承だけではなく、そこに装いは新であるが、復古的な革新性が認められると言える。

その本領論も、俗を厭うことを基幹とするのは、どの領域であつても、それは「古典」を学ぶことが高尚であつて、俗と相反するからである（尚古主義）。

書論への朱子学の浸潤とも言えるが、もつと明確な意図があつたはずであり、強烈な論理の復権の文脈で、この書論の画期性と、実学性が指摘できるが、馮班の書が、管見では確認できなかったもので、この論が制作にどう反映され、どう鑑賞されたのかは、今後の課題であろう。

また『書要』では、

宋人作書多取新意、然意須従本領中來。米老少時如集字、

晩年行法亦不離楊少師、顏魯公也。本領精熟、則心意自能變化。

(宋人が書を作る時、多く新意を表そうとしたが、その意は、本領から生まれるものでなければならぬ。米芾は若き時、集字のようだったが、晩年の行法も、楊凝式、顏真卿から離れなかった。本領が成熟して、心意が自ずから変化できるのである。)

と言ったり、

晋人循理而法生、唐人用法而意出、宋人用意而古法具在。知此方可看帖。

(晋人は理にしたがって法を生じ、唐人は法を用いて意が表れ、宋人は意を用いて古法を備えている。このことが分かって始めて法帖を見るべきである。)

と述べ、北宋以降の蘇軾・黄庭堅・米芾などの新意を尊ぶ「外向型」(陽明学系)¹⁰とその裏面に付した朱子以来の「内向型」の書論の二大潮流を整理し、それを融合させ、その合流した「朱王一致」思想の書論史的姿にも触れておきたい。総じてこの書論は、近世以後の法帖学(文人史観の模倣学)に対する一つの見識として再評価されるべきだろう。

注

- 1 津坂貞政「中国宋代士大夫の美意識に関する史的研究…書の鑑賞および題跋執筆を事例として」広島大学 博士(文学)二〇一六年
- 2 垣内景子訳『朱子語類』訳注 卷七・十二・十三(汲古書院 平成二十二年十月)を参照。
- 3 注1参照
- 4 吳國豪「董其昌書學中的趙孟頫情结」(董其昌與松江書派特展『中國書法雜誌』二〇一六年)
- 5 宇佐美文理「模倣の価値」(『中國思想研究』三二号 二〇一一年)
- 6 島田虔次『朱子学と陽明学』(岩波新書・一九六七年)参照。
- 7 『鈍吟雜錄』卷二に「有一禪者、好狎變童。又好賭博。我識之。嚴武伯酷辨以為禪者不妨其論甚高、我不習禪不解也。問之一法師。乃曰居士視此人、所作是慧是癡。若只是癡、便做不得。我見其人兩目、有類相法当淫。乃自以為重瞳思倣、天子尤可怪。」とある。
- 8 近藤康信著『伝習録』(新釈漢文大系 明治書院・一九六一一年)の訳を参照。
- 9 例えば『朱子語類』綱領に「然天下所以平、卻先須治國。國之所以治、卻先須齊家。家之所以齊、卻先須修身。身之所以修、卻先須正心。心之所以正、卻先須誠意。意之所以誠、卻先須致知。知之所以至、卻先須格物。本領全只在這兩字上。又須知如何是格物。」とあったり、『傳習録』卷上・門人陸澄錄にも「一日論為學工夫。先生曰「教人為學不可執一偏。初學時心猿意馬、控縛不定。其所思慮多是人欲一辺。故且教之靜坐息思慮。久之、俟其心意稍定。」とあり、朱子学や陽

明学で、「本領」や「心意」はよく使われる観念である。

神田喜一郎は、董其昌の陽明学は、そのルーツの一つとも言える宋の蜀学に求めている。神田喜一郎『続東洋学説林』「董其昌の思想について」(『神田喜一郎全集』第二卷、同朋舎、一九八三年)